



TITLE:

土耳其共産黨首暗殺始末

AUTHOR(S):

山内, 昌之

---

CITATION:

山内, 昌之. 土耳其共産黨首暗殺始末. 東洋史研究 1989, 47(4): 657-675

ISSUE DATE:

1989-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154392>

RIGHT:

## 土耳其共產黨首暗殺始末

山 内 昌 之

一九二一年一月二八日から二九日にかけての深夜、黒海に面したトルコの港町トラブゾンで歴史の暗闇にかき消された事件は、多くの謎に包まれている。この夜、つくられてまもないトルコ共產黨の黨首がその同志たち一四人と一緒に、誰とも下手人を特定できない不可解な状況のもとで殺害され、死體も黒海に投じられるという衝撃的な事件がおこった。

當時のトルコは、ギリシアを相手どって國民國家としての存亡の興廢をかけてたかう革命のさなかにあり、鄰接する新生社會主義國家ソビエト＝ロシアからは武器や資金の援助を仰いでいたこともあって、この北の巨人との歴史では前例がないほど友好的な關係をつくりあげていた。だからこそ、トラブゾンの事件については、犯人の正體と犯行の動機について早くから種々の臆測がかわされ、トルコの内外で人びとに取沙汰されることになったのである。犯罪がおきたことには疑問の餘地がないのに、關係者たちが妙に口をつぐんだことも事件の性格をますます謎めいたものにした。一箇月前にアゼルバイジャンからやって來たばかりの一行がソビエトの友邦領内で殺害されるというのは、何にしても醜聞には違いなかった。アンカラ政府がこの一件について正式な調査を公表もせず、ソビエトにも眞相を外交ルートを通して詳しく説明しなかったことも、この事件を包む謎の霧をいっそう深めるのに役だった。

ある見方によれば、事件は、アンカラ政府が友好國ソビエトとの關係を損なわずに、潜在的には最も危険な反對分子に成長しかねない共產黨の黨首ムスタファ・スプヒを除くために仕組んだ計略だとされる。つまり、スプヒの殺害には政府

の最高指導者ムスタファ・ケマル・パシャ、のちのアタチュルクの意志が何らかの形で働いていたというのである。これほどまでに権力の最高意志の關與を認めなくても、當時の東部アナトリアにおける軍民それぞれの實力者、東部戰線司令官キャズィム・カラベキル・パシヤとエルズルム州長官ハミト・ベイが事件の發生に責任があるという主張もこれまでに<sup>(1)</sup>出されてきた。

事件の直後、ソビエトやコミンテルン關係者のあいだでは、トルコの中央と地方のいずれであるかはともかく、殺害に公權力の意圖が加わったのではないかという疑問がささやかれていた。しかし、一九二一年三月一六日にモスクワで友好和親條約を結ぶほど、たがいの國家的存在の意義を重視していた兩國は、この事件のために雙方の同盟關係を損なつてはならないことも暗黙のうちにすぐ了解したのである。アンカラ政府にとっては、事態をあいまいに謎のままにしておく方が、真相解明によつて得られる利益よりも大きかつたということになる。そうだとすれば、事件の全貌を究明できなかった理由はどこにあるのか。これも大きな謎である。

ところで、現在のトルコ内外の歴史家のあいだでは、トラブゾンの船乗りと海員労働者のギルドの親方として威勢をふるっていたヤファ・キャファなる地元の名望家が殺害の下手人だったという見方が廣く受け入れられている。まず殺害の動機としては、ヤファがスプヒを亡命中のエンヴェル・パシヤの有力なライバルと見なしたという點が例外なくあげられる。こうして、大戰に敗れて亡命中のパシヤがアナトリアに入國すれば厄介に感じるはずの政敵をあらかじめ除いたというのである。

しかし、この説は、次の疑問に答えることができない。まず、なぜヤファはスプヒをエンヴェルの政敵として葬りさる必要があつたのか。エンヴェル最大の敵をあげるとすれば、アナトリアに入國して打倒しようとしたムスタファ・ケマルをおいて他にない。しかも、エンヴェルは一九二〇年夏らしいソビエトの領内で庇護されており、九月のバクー東方諸民族大會では演説も許されたほどである。しかも、コミンテルンに似せて、イスラム革命結社連合(イスラム・インターナシヨ

ナル)を創立しさえしたのである。スプヒとエンヴェルの支持者の層は重なっており、相互に顔見知りの者が多かった。ソビエトの心證を悪くしてまで、しかも仇敵ケマルを利するだけのスプヒ暗殺を、ヤフヤに指令して得られる利益はエンヴェルには當面なかったといつてよい。しかも、バクー大會の直後にスプヒは活動の本據地をバクーからアンカラに移すことを決意した。この雰圍氣のなかで、エンヴェルにはあえてスプヒを殺害する荒療治に出る必然性があつたのだろうか。

われわれは、一九八四年から八五年までアンカラに滞在した折りに、この事件についてこれまで未公開の電報一二通と、文面の一部が紹介済みの手紙一點をアンカラ大學革命史研究所とトルコ歴史協會の各文書保管部でそれぞれ發見調査した。この史料群の價值と性格については、粗笨ながら別に英文で紹介しておいたが、ここでは謎ときに挑むいとまがなかった。<sup>(2)</sup>そこで、今回はこの一三點の根本史料に依據して、事件の背後にシルエットが見え隠れする三人の登場人物、キヤズィム・カラベキルとムスタファ・ケマルとハミトの役割にスポットをあてながら、スプヒ暗殺の顛末について謎ときを試みることにしよう。

史料のなかで一番古い文書は、カラベキル・パシャが一九二一年一月二日にハミト・ベイにあてた電報であるが、これを讀んでまず氣がつくのは、大國民議會議長のケマルと外務省がスプヒ一行をアンカラに送らないように東部諸州の關係者に指圖していた事實である。ただし、この指示がいつ出されたかは判然としない。おそらくは、スプヒがバクーからカルスに着いた一九二〇年二月二八日の直後と思われる。それにしても、指示の内容はすこぶるあいまいだった模様である。それは、すぐにカルスから彼らを國外退去させよという意味なのか、それともアンカラ以外の東部地方であれば滞在を許してもよいという含蓄なのか、カラベキルならずとも理解に苦しむ内容だったらしい。そこで、カルスに滞在中のスプヒ一行への對應を迫られたカラベキルは、次のようにハミトに打診している。

「わが政府の求めるところに應じて、必要な措置がとられることは當然であるが故に、ムスタファ・スプヒとその組織を現在、國內に、しかも目の前のこの地域にいさせたままでよいのか、それともことごとく國外へ送られるのか、

この二つのいずれの道すじで行動がなされるのが適切なのだろうか。」<sup>(3)</sup>

ここで確認できるのは、共産黨の問題が内務省の所管にかかわる性格を帯びていたので、軍人のカラベキルは指示を求める立場にあり、ハミトは内務官僚として具體策でイニシャチブを發揮する側にあったことである。この點は、ハミトによる一月二日附返電の内容からもよくわかる。ハミトはカラベキルの疑問に答えて、アンカラ政府による共産主義運動對策の要領を明快に説明している。中央では國外から浸透する共産黨の活動を妨げるために公認の「共産黨」がつくられたので、この黨外にある人物の共産主義運動は認めがたい、と。つまり、公認の「共産黨」以外の活動は、トルコで受け入れ可能な「共産主義の様態」に反するだけでなく、國內不和をこととし騒亂を好むものにすぎない、というのである。共産主義運動に對する公權力の對應としてケマルが考へついた方策、特異な公認「共産黨」については別にふれたことがあるのでそれに譲るが、要するにハミトがスプヒたちを祖國の一致協力、調和と連帶をそこなう分子だと信じていたことは、カラベキルへの説明からも確認されるのである。

この信念は、アンカラからの訓令と結びついてスプヒたちの國外追放が必要不可欠だという結論をもたらした。われわれが発見した史料にかんする限り、ケマルとハミトのいずれが先に國外追放を提案したのかを確定する文書は見當らなかつた。しかし、重要なのは、この結論こそアンカラ政府つまりケマルの意志だったことである。その證據に、アンカラとエルズルムとの電報の往復においてケマルがハミトによる追放政策に異議を唱えた形跡はまったく見當らない。ハミトの有能な内務官僚としての感覺からしても、スプヒの滞在は、ロシアやアルメニアによる占領から解放されたばかりで、人心定まらない東部地方の治安を混亂させる危険な要因に他ならなかつた。

實際に、ハミトは人びとが公權力に反抗しかねない可能性を危惧していた。カルスでスプヒたちが活動しつづけること

は、あたかも彼らが政府の庇護下にあつて活動しているかの印象を人びとに與えるために、住民が官衙へ反抗しかねない原因をつくりだす、と。

それではハミトは、アンカラの訓令を受けながら、問題解決にどのような目算があつたのであろうか。ここでもハミトは、自分の行政権限に干渉したためにしばしば衝突した將軍カラベキルにたいして自信のほどを誇示している。つまり、問題をどの方向で處理するにしても、カラベキルのいるカルスは適當な場所ではないというのである。というのも、當時カルスにはソビエトから派遣されてアンカラに向かう途中の外交代表ムディヴァニがいたので、國外追放の一件をロシア人の目の前でひきおこすのは不都合だという理由をあげている（實際にはムディヴァニはグルジア人）。ハミトは、單刀直入にスプヒの一件處理については自分に委せるのが「安全な道」だとカラベキルに言い切っている。つまり、ソビエト外交代表の面前で行政に不慣れた軍人がこの一件を扱うよりも、思想問題の處方に習熟した内務官僚にまかせたほうがよいと言わんばかりである。そのうえ、エルズルムは問題處理の場所としてうってつけである。何故なら、エルズルムでは人びとが全體として共產主義に猛反對しているからだ、と。<sup>(5)</sup>

これも、對ソビエト政策の擔當者カラベキルへの皮肉と聞こえなくもない。二人は、一九二〇年一月にギュムリュ（アレクサンドロポリ）で開かれたトルコリアルメニア戰爭の講和會議にトルコ側全權として共に参加したおりに、お互いの個性をつぶさに觀察しあう機會があつたはずである。<sup>(6)</sup>一八七八年の出生で一九〇二年にイスタンブールの高等行政學院を修了したハミトと、一八八二年生まれだがハミトと同じ一九〇二年に陸軍士官學校を卒業したカラベキルは、たがいに相手の存在を意識していたであらう。詩藻文才にとみ外交や周旋の機微にも通じていた天才肌の若い將軍と、文官には珍しく剛直かつ言語明哲で軍人ぎらいの努力家とのあいだには、どこの國の武人と官吏にもありがちな翰當てがやはりあつた。<sup>(7)</sup>

因みに、ハミトはカラベキルを指して「すべての相談に預からねば氣の濟まない全能の裁定者」とあてこすっている。

事實、一九二一年六月になると、年少の將軍による行政への介入をめぐって立腹した州長官はエルズルムを離任する。しかし、それはトラブゾンの悲劇の後日談である。

このように、ハミトがロードス島の地方官吏の息子にすぎなかったのに、カラベキルの方はイスタンブールの門閥（父も軍人バシヤ）に生を享けたという家庭環境の違いはあるが、まず二人は當時のトルコの文と軍を代表する氣鋭のエリートだったといつてよい。

カラベキルからすれば、やや年嵩のハミトによる氣負つた提案に、お手並み拝見といったところであろう。カラベキルは、一月三日の返電のなかでハミトの考えに同意しながらも、ソビエトとの軍事協力や外交の駆け引き、アルメニア共和国との講和交渉などに發揮した國際感覺をもとに、ハミトがなおざりにしている側面をやりわりと突くのも忘れなかつた。それは、「共產主義世界との接觸と關係」をもつスプヒの追放が、ロシアに惡影響を與えて誤解されないためにはどうしたらよいのか、ということである。この對策としてカラベキルは、人民の名で行動するコムニストを人民の名で排斥すればよいという非常に老獪な案を示している。<sup>(8)</sup>

つまり、スプヒの一行がエルズルムに着いたなら、彼らの行く先々で新聞を發行して反スプヒ・キャンペーンをおこなう。人びとの示威行動が壓力となつて、それ以上の内地旅行がもはやできないこと、國內に留まつて活動もできないこと、を彼らに思いしらせる。こうして人びとを満足させることができる。國內での團結を守るために國外追放する件について、もし必要があれば、彼らに公けに傳達すればよい。これがカラベキルの策であつた。

ここでカラベキルは、彼らが望めばという條件付きではあるが、スプヒをトラブゾンから國外に追放する可能性を初めて示唆している。ただし、その場合でもトラブゾンにはソビエト領事部があるので人びとの示威行動を慎重に管理する必要がある、ポリシエヴィズムと對決するのではなく、スプヒたちの人間としての性格や資質に反對することを説明する必要があると強調している。これは、一九一九年いらい自らトルコの東方關係の窓口になつて、オルジョニキーゼなどカ

フカースの俊敏なポリシェヴィキとねばり強く折衝してきたカラベキルならではの慎重な配慮といえるだろう。

最後にカラベキルは、コミンテルンと関係するスプヒたちの國外追放が外國のコムニストのあいだに憤激をひきおこさないためにも、追放後すぐに、スプヒたちの人間性が疑わしく祖國での團結や平穩を守る必要から人民の要求を餘儀なく實行したというコミュニケーションを出すことが適當である、と念を押している。

カラベキルの慎重さを例證する記事にはことかかない。彼は、一月一日にハミトにたいして、巷間流布している噂の眞偽をただしている。

スプヒらがエルズルムに着いたなら、人びとが一行を馬の鞍に後ろ向きに乘せて侮辱を加えるという風聞が、カルスマで達していたらしい。この件についても、カラベキルは分別を見せるのを忘れない。人びとが感情を直接あらわにするのは當然にも自由であるが、「國際的な性格をもつこの一行を馬に乘せて侮辱にさらすことは、わが國民の利益に合致しないので、世論と祖國の感情を穩健かつ洗練された形でかれらに傳えることが必要である」<sup>(9)</sup>。

それでも、カラベキルにしても、スプヒ一行に壓力を加える可能性までは否定していない點を見落としてはならない。スプヒが一月一日にカラベキルと會つて、エルズルム經由で出かけると侮辱を受けるかもしれないから、一旦はグルジア共和國に出てチフリス經由で再びトルコを旅行すると述べた時のカラベキルの反應はにべもなかった。カラベキルは、もし國外（バクー）へ戻るならばいざ知らず、アンカラへの旅行を續けるなら、エルズルム經由で出かけて内地の人びとの感情をつぶさに知ったほうがよい、と斷言している。この様子は、カラベキルの回顧録にもほぼ同じ情景として再現されている<sup>(10)</sup>。

カラベキルの普段にも似合わぬ厳しさは、スプヒを當惑させたらしい。スプヒがいやがうえにも慎重さを期することにしたのはそのためであらう。彼は、仲間の一部を先に出發させて様子を見させた上で、州長官ハミトから道中では陰謀や侮辱を受けない旨の保證が來なければ國外に戻るつもりだ、とカラベキルに言明しているからである。



ハミトはスプヒの打診にたいして、一行に危害を加えることはないと保證した。これによってスプヒは、一行を八人ずつの二グループに分けて、最初のグループを一月一四日朝にカルスから出發させ、エルズルムへの安全到着の知らせを受け取ってから自分も出發するという慎重な手筈をふんだ。

住民に壓力をかけさせてスプヒにアンカラ行きを斷念させようとした點では、カラベキルの策もハミトの計と大差がなかったのは事實である。この限りであれば、カラベキルも間接的にスプヒの悲劇に責任があつたといわれても仕方がないだろう。實際、カラベキルは或る重要な提案をハミトにたいしておこなっている。

「ムスタファ・スプヒは第一グループによって彼らにたいするエルズルムでの動きを盾で感じようとしたので、第二グループの出發を妨げるような理由をつくりださないことを記憶に留められて、彼らの到着についてお知らせくださるようお願いする<sup>(11)</sup>。」

事にあたつてこれほど慎重なカラベキルについて言うと、直接の責任を負うべきスプヒのカルス滞在時に限定するなら、彼が暗殺計畫のシナリオを描いたという臆測はまず成り立たないのではないだろうか。

しかし、ハミトが史料の主人公として登場するスプヒのエルズルム滞在の時期になると事態は一變する。何よりもエルズルムの實情は、ハミトの保證とは裏腹に最初からカルスとはまったく違う様相を呈していた。

スプヒ一行の第一グループがカルスをたった翌日の一月一五日、エルズルム選出の國會議員を含む名望家、ウラマー、ギルドの親方などの市民代表が政廳を訪れ、政府の共產主義對策についてハミトに説明を求めた。ハミトは、先にカラベキルへ回牒した政府訓令の線にそつて、アンカラの公認共產黨がつくられた理由と目的、スプヒの行動の個人的性格、彼がどの陣營にも庇護されていないことを説明して、一行が来るなら政府が「あらゆる種類の措置」をとると附言した。この發言と先のカラベキルの提案との間には大きなニュアンスの差がある。つまり、カラベキルの方は問題の國際性を考慮して慎重な姿勢を打ちだしたのにたいし、ハミトは「あらゆる種類の措置」をとることも辭さないと嚴しい構えをくずし

ていない。ハミトが市民代表に傳えた具體策は、住民を共產主義反對に仕向けるために厳しい措置をとること、必要ならば武器で防衛すること、の二點だった。

この言辭ではまるで、興奮の只中にある市民を宥和するというよりも、州長官が却って進んで煽動しているようなものである。このあたりは《熱狂者》（デリ）と仇名をつけられ、後になるとケマル暗殺未遂の陰謀に連座するハミトの直情徑行な性格を髣髴させる。得たり賢しとばかりに、この説明を受けた市民代表は、二四時間後にこの問題を討論するために大會を開くとハミトに傳えた。<sup>(12)</sup>

この人民大會は、ハミトによれば、「人民のあらゆる階級の代表」が参加してエルズルム市廳舎でおこなわれた。まず、共產主義とは何かについて参加者が議論した上で、これに反對するための結社がつくられ、二〇人から成る執行委員會が直ちに選ばれている。神聖防衛團と呼ばれるこの結社の創立については、政府にもすぐ正式に傳えられた。<sup>(13)</sup>

さて、スプヒ一行はいよいよ一月二日にエルズルムに着いた。ハミトは、その折りの情景をアンカラのケマルにこう傳えている。

「ムスタファ・スプヒは一七人の仲間と一緒にエルズルムにやってきたが、驛に集まっていた數千もの人びとによって侮辱され、追い出された。あらかじめとられた警察による規制の結果として、彼らは實際に襲撃されなかったが、スプヒはエルズルムに逗留せずに、旅を続けざるをえなかった。彼らはトラブゾン道をたどっているが、途中の地點では住民は宿舍や食物を與えていない。<sup>(14)</sup>」

ここでわかるのは、スプヒ一行がいざ來ると、ハミトは彼らへの暴力行使に齒止めをかけたことである。カラベキルが危惧した點を彼なりに理解したせいでもあろうか。それでも、住民による抗議行動やサボタージュを阻害した様子は見受けられない。

アンカラのケマルが一連の經過について報告を受けており、必要な指示や訓令も與えていたことは、ハミトの各電報か

らも確認されるのだが、われわれが発見した關係史料は簡潔な電報一通だけである。

「ムスタファ・スプヒ・エフエンディーの一行は何人いるのか、かれらもムスタファ・スプヒと一緒に送られるのか、送られないのかをお知らせくださるようお願いする。」（一九二一年一月二五日附ハミト<sup>(15)</sup>あて）

ケマルは、スプヒの「送られる」先については言及していない。これは、彼が行き先について尋ねる必要のなかったこと、つまりそれを知っていたことを意味する。ケマルとハミトが合意していたスプヒ一行の最終到着地がトラブゾンであったのか、あるいはその先のどこかであったのかは、残された史料からはもはや知ることができない。ハミトにしてみると、とにかく一行をトラブゾンまで送り出してしまえば、自分の職責を全うできると考えたのだろうか。それにしても、ケマルは何故ここでスプヒたちが一團となって送られるのか否かを気にしているのだろうか。かねてからの懸案を一舉に處理したがついているような口ぶりにも感じられるが、もとよりこれも推量の域を出ない。

ハミトは、二九日にケマルに打った電報のなかで、スプヒと妻と仲間の一七人が出發したと答えている。そこでも、一行が「トラブゾンまでの途中にあたるすべての地點で同じ結果にあっている」と住民の拒否反應の次第を傳えている。つまり、エルズルム出發後のスプヒ一行についても必要な監視措置を怠らなかつたことが分かる。<sup>(16)</sup>

カラベキルの調子とはややニュアンスに違いがあるものの、ハミトもカラベキルとの連絡協議の結果だとして、スプヒを國外追放する方針をケマルに傳えている。

「激昂状態にある人びとが襲撃する餘地を與えずに、スプヒとその追隨者たちを庇護しながら國外に追放されるように、私は彼らをトラブゾンに送るであらう。」<sup>(17)</sup>

もしこの方針に同意できなければ新たに命令を送るようハミトは請訓したが、ケマルも格別に異議を唱えなかつたようである。それでは、ハミトは自分の持論をいかにして、命令實施にあたる下僚に徹底させようとしたのか。この一例を、彼がスプヒ一行への對處を管下のバイブルト郡長に指示した通達の内容に見いだせる。そこでは、エルズルム住民が追

拂った一行が、「トラブゾン經由で國外に放逐されるべく、保護下におかれてそちらの方面に送られた」としたうえで採るべき方策を具體的に示している。

「その地に彼らが着いたなら、何人とも交わる機会を與えずに、同じく武装した護衛の下にギムシューハネに向けて送ること、實際に襲撃することがないように義務つけて住民がこれらにたいして食事と寢所をあたえないこと、侮辱を加えることについてはあえて阻止しないこと、が必要である」<sup>(18)</sup>

以上をまとめてみると、ハミトにしてもスプヒ暗殺を直接に指示したり、その一行への暴力を教唆したわけではない。ただ、興奮状態にある人びとが一行に「侮辱を加えること」をあえて阻止しなければどうなるのかを、地方住民の心理に明るいハミトが知らなかったはずがない。それを承知の上で、エルズルム以上に興奮の坩堝にあったトラブゾンに一行を送り込んだのだから、ハミトこそはスプヒ一行に悲劇の舞臺を用意した張本人ということになる。それでは、トラブゾンで彼らに直接手をかけた者はだれなのか。スプヒたちは、何故に抹殺されねばならなかったのか。かくして、舞臺はトラブゾンに暗轉することになる。

トラブゾンは、ハミト・ベイにとって第二の故郷といつてよい町であつた。彼は、一九二〇年二月から六月、九月から一〇月の二度にわたつてトラブゾン州の長官を勤め、大戦中にロシア軍に占領されて荒廢しきつた人心の立て直しに努めた。その治績は、住民に高く評價され、彼をとりまく地方名望家の派閥さえできたらしい。また、ケマルを支えた抵抗運動組織のアナトリアルメリア權利擁護團トラブゾン支部のなかにも確固たる勢力基盤をつくつた。このためにアンカラのケマルは、ハミトの豪放不羈な性格を危ぶむとともに、その勢力伸長を警戒せざるをえなかつた。ハミトが、重要なトラブゾン州長官職に二度も補せられたのはその有能さのためであり、二度もすぐに更迭されたのは中央との折り合いの悪さからだつた。ハミトが離任したのち、後任としてイスマイル・サブリ・ベイ（一八九九年高等行政學院卒）がアンテプ縣知事からまわされた。これは代理職としての勤務（一九二〇年一月—二年四月）であつた。サブリの温厚な人柄のせいも

あつて、鄰の州に轉じてハミトの強烈な個性と影響は相當にトラブゾンに残つたままであつた。あるいは、機會あるごとく舊任地の内政に容喙していたかもしれない。ともあれ、事件がおきたのは、サブリ在職中のことであつた。

さて、トラブゾンは黒海きつての港町だつたせいもあり、様々な風が外界から入つてきた。一九二〇年から二年にかけて吹いた風は、バクー大會開催やソビエト領事部開設などに象徴されるように、住民のあいだにソビエトと共產主義への關心をもたらしした。ハミトは、トラブゾン在任中に、ソビエトへの接近がイギリスなどの帝國主義諸國に對抗する以上國家的利益からやむをえない選擇であり、イスラムやトルコの傳統性と相いれないイデオロギー的要請からではないことを住民たちに説いていた。

もう一つの風は、エンヴェル・パシヤが入國の玄關口としてトラブゾンに上陸するという噂を運んできた。實際に、エンヴェルはアナトリア入りの露拂いとしてキュチュク・タラート・ベイなどの部下をトラブゾンに送りこんでいた。このキュチュク・タラートは、一九二〇年春にバクーでつくられたトルコ共產黨の役員でもあり、スプヒのバクー到着後も黨にとどまり彼の知己になつた人物である。<sup>(19)</sup>キュチュク・タラートは、バクー大會が終わるとエンヴェルのアナトリア入りの先鋒を買つて出てトラブゾンに滞在していたが、そこで不思議な縁に結ばれてスプヒ一行の最後を見届けたのである。

事件後の五月一四日に、キュチュク・タラートはロシア領のトゥアプセにいたハシル・パシヤ（エンヴェルの叔父）にあつた手紙のなかで事件の真相を解く上で、かなり有力な手がかりになる情報を傳えている。この手紙は、現在トルコ歴史協會アルシーヴのエンヴェル・パシヤ文書の中に保管されているが、全部で七フォリオにおよぶ長文のものである。ここでは直接事件に係る箇所だけを邦譯し、ついでラテン字による資料轉寫を註で紹介する（註25）ことにしよう。<sup>(20)</sup>ところで、この手紙についていうと、内容の一部をトルコでも故アイデミル氏が一九七一年に紹介している。<sup>(21)</sup>但し、氏はその出所を明らかにしておらず、われわれが参照した文書ともやや異同がある。アイデミル氏は「B」の實線部分を割愛し、<sup>(22)</sup>「D」については全然紹介していない。「C」の文面は、われわれの依據した手紙の文章とは微妙に表現が異なっている。

なお、氏は〔A〕と〔E〕についてはまったく紹介していないが、この部分もわれわれの謎ときには缺かせない箇所ではなからうか。

それでは、一月二八日にトラブゾンへ着いたスプヒたちの身に何が起きたのか。キュチュク・タラート・ペイは、事件の闇を被っていたヴェールを少しずつわれわれの目の前で剥いでくれる。

〔A〕 したがって、私の立場を確実に改善することが必要です。このために、君が接觸しているトルコ人のコムニストたちになりたいして、下に書いたような形で問題を取り急ぎ説明し、かれらを可能な限り落ち着かせるように注意を拂うとともに、ロシア人たちにも問題を知らせてくださるなら非常に好都合です。

〔B〕 ムスタファ・スプヒとその仲間にまつわる悲劇は、次のような形でひきおこされました。この人物たちは、カルスにやって来た時、表向きには快く迎えられたかのようでした。たとえ實際に事態がそうだったにしても、これももっぱらキャズィム・カラベキルのマヌーバー以外の何物でもありませんでした。カラベキルがひそかにとったエルズルム州長官ハミト・ペイとの連絡によって、この同志たちはエルズルムに送られました。そして、かれらは、政廳當局に鼓舞された人びとによって、また同時に神聖防衛團の名のもとに出現したならず者や狂信家たちの一團から成る委員會の願ひに應じた人びとによって、非常に恐ろしい襲撃とのしりを受けました。かれらは、エルズルムには留まらずに、驛から出發しました。トラブゾンに至るまでの町と村でも、またしても當局の唆しと、權利擁護團委員會をつくりだした一部の壯士たちの唆しによって、あらゆる種類の屈辱に出會いました。

エルズルム州長官ハミト・ペイは、<sup>(23)</sup>トラブゾン權利擁護團執行委員會あてに打った電報のなかで、この哀れな一行の抹殺について公然と言及する破廉恥さをも示していました。

〔C〕

ムスタファ・スプヒとその仲間、あたかもアンカラに出かけるかのようにトラブゾンにやって来ました。波止場では、無知蒙昧な人びとによって、すぐ前と同じやり方で悪質な侮辱を加えられました。そして、ずっと前から當局が用意していた動力船に乗せられました。

〔D〕

トラブゾンでの首謀者は、師団長のヌリと参謀長のゼキでした。動力船がスウルメネにいたると、師団長と参謀は権利擁護團の壯士たちと協力して當局による血まみれの制裁措置を用いました。かれらは、動力船に不正規兵の衣服を着せた兵士と憲兵を送りこんで、哀れな一行を抹殺させたのです。この殺人と虐殺問題の立案者は、次の通りです。

第三師団長ヌリ、参謀長ゼキ、トラブゾン権利擁護團執行委員長ハジ・アフメト、擁護團メンバーのうちハジ・アリー、ハーフィズザーデ・オメル、ハッキの各エフェンディーたち、同じくメンバーのホジャ・マフムト、また同じくメンバーの奸商ハティープザーデ・ムスタファ、またメンバーのダニシュの各エフェンディーたち。エルズルム州長官ハミトは、完璧に煽動者のひとりです。トラブゾン州の前長官サブリ・ベイはこの一件には関係していませんが、ただ優柔不斷ぶりに乗じられました。

東部戦線司令官のキャズィム・カラベキルは、もし望んでさえいれば、當然この事件を妨げることができました。トルキスタンから来た同志キャズィム大尉は、バイブルトとギムシユハネとのあいだで、軍當局が直接に手をくだして抹殺されたときりに囁かれています。

〔E〕

トラブゾンにいるわれわれの友人たち、とくにわれわれと一心同體で活動しているキュチュク・タラートと、船乗りと海員労働者の組織の親方ヤファ・レイスは、この凶行を防ぐために大いに盡力しましたが、妨げることができませんでした。かれらは、かろうじて三人の生命をそれぞれ別なやり方で救いました。私が調べた結果によると、以上が問題の真相なのです。

兄弟よ。問題の真相についていえば、ほとんどこのようにして生じたのです。君は真相を速やかに周囲の人びとに広めなくてはなりません。私は、この地で私のいる場所を絶対に安全だとは思えなくなってきました。最後まで不撓不屈に、あきらめないことは言うまでもありませんが。<sup>(25)</sup>

この史料を読むと、故アイデミル氏が何故「D」をすべて割愛し、「B」も大幅に省略したのか、その疑問も氷解する。その箇所には、これまでひたかくしに隠されてきた事件の真相に迫る明白な手がかりが含まれていたのである。それでも氏は、さわりの一節についてはほぼそのまま残して、教唆者が誰かを考える手がかりを讀者たちにも與えてくれた。その箇所は、言うまでもなく、ハミトがトラブゾン權利擁護團あてに打った電報のなかで「一行の抹殺について公然と言及」したという點線部のくだりである。

事件から少し時間のたった二月五日にハミトは内務省に電報を送っている。その内容は、さながらハミト自身があたかもユロスでもあるかのように、一連の経過で彼の果たした黒い役割の謎を解きほぐしてくれる。ハミトによれば、スプヒの事件は共產主義の煽動、公認共產黨の出現、バクーでのイスラム彈壓などの興奮した情報が「自然に人びとを動かし」結果だとされる。したがって、スプヒの殺害には遺憾な點が毫も存しない、これがハミトの明快な結論であった。彼の言い分を聞いていると、スプヒ暗殺を奇貨として歓迎するどころか、殺害してどこが悪いといった開き直りのような口ぶりさえ感じられる。こうしたハミトの獻策内容から判斷すると、アンカラの最高意志が事件に關與した可能性はほぼ消えるように思われる。

「先般來これら數多くの事態が生み出した動向を努めて妨げることは、反政府勢力に有利な自信を與えることになるので、大變危険であります。今日、ムスタファ・スプヒは芟除され、アンカラの黨與たちも雲散霧消しました。政府、より正確に言えば、國民會議議長が人民を有める傳達や行動もなされたのであります。影響を與える要因の消滅



に伴い、熱狂的行動が除かれるのは當然であります。それ故、結果のほどに泰然自若とされること、またこの件に關して注意深く振舞われる必要があることを申し述べるのが私の義務だと考えます。<sup>(26)</sup>」

さしあたり、スプヒ一行殺害の下手人をめぐる謎ときについてはまず落着いたといつてよいのではないか。しかし、一つの謎の解決は、他の謎の始まりである。たとえば、次のような疑問に今のわれわれは十分に答えざる材料をもちあわせていない。

第一に、ハミトはアンカラ中央の意志と關係なく何故事件をひきおこしたのか。それは、權力鬭争の一環として、ムスタファ・ケマルの立場を國內外で悪くするために巧妙に仕掛けた畏でもあったのか。第二に、スプヒの殺害に師團長や參謀レベルの高級將校が關與していたとすれば、彼らの實行行爲は獨斷專行だったのだろうか。この場合に、アンカラの參謀本部や東部戰線司令部のカラベキル、ひいてはハミトは如何なる役割を果たしたのだろうか。第三に、船乗りギルドの親方ヤフヤは、トラブゾンの波止場の最大の實力者だったのに、何故に犯行を阻止できなかったのか。そして、何故その後一九二二年七月三日に、これまた不可解な狀況のなかで暗殺されねばならなかったのか。

これらの疑問を解く史料はまだわれわれの目につく範圍には現れていない。ここでは、いたずらに推測を重ねる愚を避けて、スプヒ暗殺事件にまつわる謎の一端に光があてられたことだけで当面われわれは満足すべきであろう。

## 註

(1) スプヒ事件をめぐる見解の對立については、別の箇所であつたので省略する。Yamauchi Masayuki, "A Possible Solution of Mustafa Subhi's Case. A Letter in the Archives of the Turkish Historical Society", *Turkestan*

*als historischer Faktor und politische Idee*, herausgegeben von E. von Mende, Köln, 1987, pp. 195—199; Masayuki YAMA-UCHI, "The Adventure of Mustafa Subhi in Anatolia, January 1921", *History and Culture*

- 東京大學教養學部人文科學紀要第八十七輯 歴史と文化 Ⅳ  
 歴史學研究報告第二十集、vol. XVI, 1988, pp. 259—286.  
 後者は筆者の海外出張中に印刷されたので、いくつかの誤植  
 を訂正できなかった。この機会に改めておきたい。また、本  
 稿では、註(2)にあげたアルシーウ番號ではなく、われわれ  
 が校訂した後者の史料番號によって文書を引用する。

- (2) *Türk İnkılaþ Tarihi Enstitüsü Arşivi*, Dosya 24 / Fihrist 3070, 3071, 3071a, 3072, 3073, 3074, 3075, 3076, 3077, 3342, 3343, 3344. *Türk Tarih Kurumu Enerji Arşivi*, Karton 33/Dosya 3/Fihrist 829. 歴史協會所藏文書については、史料の複寫が禁止されている。

- (3) YAMA-UCHI (1988), No. 1.
- (4) 山内昌之『神軍 綠軍 赤軍』(筑摩書房、一九八八年)。
- (5) YAMA-UCHI (1988), No. 2. この文書の日附が一九二一年一月三日とあるのは、一月二日の誤植。
- (6) 山内昌之「トルコリアルメニア戦争とトルコの對ソ關係」(一九一九—一九二〇)『スラヴ研究』一九號(一九七四年)。

- (7) カラムキルのプロフィールについては Kâzım Karabekir, *İstibhal Harbimiz* [わが獨立戦争], İstanbul, 1960. 以下の経歴については Hayri Orhun v.s., *Meşhur Valiler* [著名な州長官たち], İstanbul, 1966, s.391—445; Kâmil Erdeba, *Millî Micaadide Vilayetler ve Valiler* [民族闘争における州と州長官たち], İstanbul, 1975, s.71—74,

- 189—200.
- 二人に關しては、以下の記述もこれらの文獻に依據した。
- (8) YAMA-UCHI (1986), No. 3.
- (9) YAMA-UCHI (1986), No. 4.
- (10) Karabekir (1960), s. 909—910.
- (11) YAMA-UCHI (1986), No. 5. *eshābīn* は *eshābīn* の誤植。

- (12) YAMA-UCHI (1988), No. 6.
- (13) YAMA-UCHI (1988), No. 7. 'ünvanyla だ' 'unvân-  
yla の親植'.
- (14) YAMA-UCHI (1988), No. 8.
- (15) YAMA-UCHI (1988), No. 9.
- (16) YAMA-UCHI (1988), No. 11.
- (17) YAMA-UCHI (1988), No. 6.
- (18) YAMA-UCHI (1988), No. 10.
- (19) 山内昌之「レハノ革命とせむる『東方關係』(一九一九一  
一九二〇)」「歴史學研究」三三八五號(一九七二年六月)。
- (20) Yamauchi (1987) のなかに英語を示してゐた。
- (21) Ş. S. Aydemir, "Mustafa Suphi Olayı hakkında" [ヤ  
マタノ・スフイ事件と關して], *Milliyet* [國武], 21 Te-  
mmuz 1971, s. 2.
- (22) «Mustafa Suphi ve arkadaşları, Trabzonda önceden  
hazırlanan bir motore bindirildiler. Motor Sürmeye  
gidince, vastaya başka silahlar bindirilmiştir»  
(23) トートマンバダ bahsetmek へ bahsetmiştir へ變へて大

章を終わらせている。

- (24) こいつ、キョウキョウ・タラートはおそろく機密保全その他  
の理由で自分を三人稱化して表現している。  
(25) 以上の原文のラテン字轉寫を以下に示す。

[A] Binâ'en-aleyh benim vaz'iyetimi behemehâl ıslâh lâzımdır. Bunun için temâsa bulunduğun Türk Komünistlerine şir'atle meseleyi âttdeki şekilde anlatmağa ve onları mümkün olduğu kadar te'mine itina' etmekle berâber Ruslara da bildirirsen, böyle çok iyi olur.

[B] Mustafâ Subhi ve rûfekâsı hakkında yapılan fecâat şu sûretle vücûde gelmiştir. Bunlar Karşı geldikleri vakit zâhiren hüs-nü kabûle mazhar olmuşlar gibi bir hâl vakti' olmuşa da, bu münhasıran Kâzım Karabekir'in bir manevrasından başka bir şey değildi. El altından Erzurum Vâlisi Hamid Bey'e bil-muhâbere bu Yoldaşlar Erzurum'a gönd-  
erilmiş ve Hükûmetin teşvikâtıyla ve aynı zamanda Muhâfaza-i Mukaddesât nâmı altında meydana çıkan mütegalibe ve sofatlar gürûbünden müteşekkil bir hey'etin arzusu dâhilinde halk tarafından pek fecî bir tecâvüz ve istisâle uğramışlardır.

Erzurum'da bırakılmadan istasyondan yola çıkarılmışlar ve Trabzon'a kadar her kasba ve köyde yine Hükûmetin ve Müdâfa'a-i Hukûk Hey'etlerini

vücûde getiren bir takım zorbalardan teşvikâtı ile envâ'i hakârete uğramışlardır.

Erzurum Vâlisi Hamid Bey, Trabzon Müdâfa'a-i Hukûk Hey'eti Merkezîyesine verdiği bir telgrafla 'alenen bu zavallıların imhâsından bahsetmek kûs-tâhlığını gösteriyordu.

[C] Mustafâ Subhi ve arkadaşları gûyâ Ankarâ'ya gitmek üzere Trabzon'a geldiler. İskele'de ma'sûm halk tarafından ber-minval-i sâbık fena hakâretlere uğrattılar ve Hükûmetçe daha evvel ihzâr edilen motora ırkâb edildiler.

[D] Trabzon'da elebaşı, Fırka Kumandanı Nûri ve Erkânı Harbi Re'isi Zeki idi. Motor Sürmene'ye gidince, Kumandan ve Erkânı Harbi Müdâfa'a-i Hukûk'taki zorbalarla bil-iştirâk Hükûmetin kanlı vesâitini kullandılar. Motora basbozruk elbisesi giydirilmiş asker ve jandarma gürûderdiler. Zavalıları imhâ ettirdiler. Bu katli ve imhâ me'selesinin müretibleri şunlardır.

Üçüncü Fırka Kumandanı Nûrî, Erkânı Harbi Zekî, Trabzon Müdâfa'a-i Hukûk Cem'iyeti Hey'et-i Merkezîyesi Re'isi Hacı Ahmed, âzâlardan Hacı 'Alî, Hâfızzâde 'Ömer ve Hakkî Efendiler ve yine âzâdan Hoca Mahmûd ve yine âzâdan muhkir tâcirlerden Hâfızzâde Mustafâ ve yine âzâdan Dâniş

Efendilerdir.

Erzurum Vâlisi Hamid tamâmıyle mügevniklerdendir. Sâbık Trabzon Vâlisi Sabri Bey bu işte 'alâkadâr değildir. Yalnız za'afından istifade olunmuştur.

Sark Cephesi Kumandanı Kâzım Karabekir isteseydi, bi't-tabi' buna mani' olurdu. Türkistan'dan gelen Yüzbaşı Kâzım Yoldaş, Bayburt ile Gümüşhâne arasında doğrudan doğruya cihet-i 'askeriye tarafından imhâ ettirildiği kuvvetle söyleniyor.

[E] Trabzon'daki arkadaşlarımız ve bi'l-hâssa tamâmıyle bizimle çalışan Küçük Tal'at'la kayıkcılar ve

'amele teşkilâtının re'isi Yahyâ Re'is bu fenalığın önüne geçmek için çok çalışmışlarsa da, mani' olamamışlardır. Yalnız üç kişinin birer sürele hayâtını kurtarmışlardır. Netice-i tahkikâtıma göre me'sele bundan 'ibârettir.

Kardeşim, fi'l-hakika me'sele şekil i'tibârıyle hemen hemen bu sürele cereyân etmiştir. Sen bunu sür'atle sağa sola neşretmelisin. Ben burada mevkî'mi kat'iyen emîn görmemeğe başladım. Tabi'i sonuna kadar sebât ve metâneti elden bırakmıyacağım.

(S) YAMA-UCHI (1988), No. 12. tarz 𐰽 tard, zahâb 𐰽 zehâb 𐰽 𐰽

view of the nature of the silk-reeling industry, were the product of the peculiar conditions of China facing the world economic crisis with the insufficient accumulation of capital. They were the transient product of the process of China's way out of the economic crisis. And as such they were not the elements which would develop irreversibly into state monopoly capitalism.

## THE MYSTERY OF MUSTAFA SUBHI'S CASE

YAMAUCHI Masayuki

On the night of January 28/29, 1921, Mustafa Subhi and fourteen comrades were dumped overload to drown in the Black Sea off the coast of Trabzon. This crime which happened under mysterious circumstances has long been the subject of dispute.

Who did induce or compel Subhi, the head of the newly established Turkish Communist Party, and his retinue of trusted companions to board a boat? Who was just ultimately responsible for this act?

No one has ever untangled the mystery on present evidence. According to prevalent view, Yahya Kâhya, the leader of the boatman guild, may have ordered to get rid of dangerous enemies. Many people has long believed this is most likely of all.

During my stay in Ankara of 1984—85, I was able to have access to the Archives of the Turkish Historical Society and the Institute for the History of the Turkish Revolution. In the course of my study there, I could find some pieces of unpublished documents covering the mystery of Subhi's disappearance. Among those the most intriguing material is a letter dated upon May 14, 1921 to Halil Pasha at Tuapse from Küçük Talât Bey who stayed at Trabzon in order to redouble his efforts secretly to extend Enver Pasha's organization inside Anatolia.

In this heretofore-unknown letter, Küçük Talât Bey explained that these communists were murdered under either tacit approval or encouragement of local authorities. Among others Hamid Bey, the Governor of

Erzurum, acted on his own initiative. The local civilian and military authorities, even including a commander and the chief of the staff of the 3rd Division staying at Trabzon, should assume the responsibility for Subhi's death. Küçük Talât Bey even listed names of those who were considered to be responsible for this crime. Most of them are composed of local notables belonging to Trabzon Branch of the Union of Defense of the National Rights of Anatolia and Rumelia.

## ON CONCEALING THE CRIMES OF FAMILY MEMBERS

NAKAMURA Shigeo

In the history of Chinese law the origins of the law concerning the concealment of crimes by family members, according to which, those who conceal the crimes of their relatives are either exempted from criminal prosecution, or charged with minor offenses, are very ancient. For example, they are detectable in the *Analects*. Also in the legal codes of the Tang dynasty this law is set forth in detail. Later dynasties, including the Qing, also recognized this law.

While many previous studies of this topic have been made, they have not systematically ordered the various provisions of these laws. This paper will attempt to fill that gap in the research surrounding this topic. While leaving discussions of these laws to other studies, this paper particularly will focus on an examination of various provisions of the Qing dynasty laws, taking up a few decisions from collections of judicial precedents. The paper will try to introduce systematically the legal status of laws pertaining to the concealing of crimes by family members. Since this traditional law also influenced the Japanese legal system, this paper will also briefly discuss the particulars of that influence.